# 聞一多暗殺事件と1946年の中国時局

聞　　黎　明
（訳：西野可奈　監訳：別枝行夫）

1946年７月11日、著名な民主活動家の李公樸は、昆明で国民党の特務に暗殺された。つづく15日、西南聯合大学教授で、著名な詩人である聞一多も同じ市内で特務に命を奪われた。同行した息子の聞立鶴も体に数発の銃弾を受け、命が危ぶまれた。同じ市内で、五日の間に連続して二つの残虐な事件がおこり、かつ被害者はふたりとも中国三大政党の一つである中国民主同盟中央執行委員会委員と、その政協代表団の顧問であった。一触即発で全面的な内戦が起こりかねない状況下で、この事件は戦後中国時局の多方面に影響を与えないわけにはいかなかった。本稿の目的は、聞一多の暗殺事件を主に取り上げつつ、定説となっている問題に対して再検討を行い、1946年の中国時局の変化を全体的にとらえることにある。

## 一、社会の強烈な反響

1946年は、戦後中国が急激に転換に向かう重要な一年であった。年初には、アメリカの特使マーシャル将軍の斡旋の下、国民党はそれまでなかった中国共産党、民主同盟、青年党および無党派代表と共に第一次政治協商会議を開催した。困難な闘争を経て、会議は国内団結と民主進歩に利する和平建国綱領などの五項目を可決した。

政治協商会議における五項協議の誕生は、戦乱に倦んだ中国人民に当初は良い反応をもたらした。しかし、３月に開かれた国民党第６期２中全体会議で、決議に公然と反対する一連の議案が可決された。そこでは政治協商協議の改訂が問題となり、東北問題で紛争が持ち上がり、重慶較場口事件、南通事件、南京下関事件などにいたる一連の流血事件が、このような情勢のもとで続いて発生した。国民党の強硬策は、平和と民主、団結を渇望する全国人民の一致した反対を引きおこした。各地で内戦反対の気運がまさに高まっているその時に、較場口事件で特務に殴られて負傷したばかりの李公樸が、ついに国民党の特務に暗殺され、続く聞一多が白昼数多くの特務に囲まれて狙撃されるとは、いったい誰が予想しえたであろうか。この一連の出来事は、当然のことながら世論から強烈に糾弾された。

７月17日、国民党と中国共産党の和平会議に参加していた中国共産党の代表団は、李公樸と聞一多暗殺の正確な情報を入手し、ただちに国民党に対して厳重な抗議を提出した。その中で、国民党が大挙して解放区に進攻していると同時に“特務機関に大後方（訳注：

抗日戦争時に日本軍の勢力の及ばなかった地区：四川、雲南、陝西、甘粛のこと）で平和と民主指導者を暗殺することを容認、指示している”、“このような野蛮で卑劣なやり方は、独伊日ファシスト国家でさえ好き放題にはやらなかったことだ”と指摘した[1)]。18日には、周恩来は上海で開いた国内外記者の招待会上で、今回の事件について“その深刻さは内戦にも劣らない”と指摘した[2)]。中国民主同盟は、党内の二人の中央委員があいついで殺害されたことに驚きかつ憤激し、国民党による民主指導者の迫害について“時間の経過と共に、ますますそのやり口は悪辣になっていく”と表明した[3)]。しかし、“民主同盟は中国の平和と民主を勝ち取るために、このような暴行事件をうけたからといって、決して恐れはしない。更に積極的に更に勇敢に前進するのみである。中国の平和と民主を勝ち取るため、それ以外に李・聞両先生の地下の魂をなぐさめることはできない。”[4)]

中国共産党と民主同盟の抗議は、もとより予想されたものであるが、より重視されなければならないのは、人心を推し量る晴雨計（バロメーター）となる中間知識人の反応であった。中間知識人の数は多くはないが、進歩的勢力と反動勢力がともに少ない中国社会では、数が最も多い中間的立場をとる者達の代弁者となった。同時に、この階層は学術教育などの文化活動を職業としているものが多く、その立場、観点と傾向は、社会に有力な影響を与える各種媒体に容易に受け入れられるものであった。この種の影響は情勢が不安定な時代にあっては常に人心を左右するばかりか、政治という天秤がどちらに傾くかにも関わっているのであった。

中間知識人について述べるならば、彼らの李、聞両者の死についての反応には違いがあった。弁護をする必要はないが、人々にとって李公樸は、政治的色彩が比較的濃厚な人物である。それは1927年の国共分裂時に早くも国民党を離党し、抗戦が勃発する前、まさに国民党に逮捕され入獄させられた救国七君子の一人であり、かつて延安で中国共産党の指導者毛沢東と接見した人物であることが思い浮かぶからであった。これにより、人の目には、李公樸は中国共産党の外延にいる職業活動家と映り、このような政治的人物が暗殺されるのは意外なことではないと感じられた。人々は国民党が民主を圧迫することに対して抗議を示したのであった。天津「大公報」に掲載された一編の社説にこのような心理状態が具体的に描き出されている。“李公樸という人は、鴻毛の軽いが如くに簡単に殺されたが、暗殺されたことの意味は泰山の如く重いものとなった。仮に李氏の死が政治的背景によるものならば、すなわち前方の兵争、後方の暗殺、それらは何と国家大乱の象徴ではないか？”[5)] 事実もそのとおりであった。もしもこのあとに聞一多の暗殺が続かなければ、李・聞両殺害事件は国内外でこのように大きな衝撃をもたらさなかったであろう。

李公樸と比して聞一多は米国留学経験があり、詩人であり学者であり、大学教授の職業を持ち、その自由主義者としてのあり方は、暗殺時にさらに激しく中間知識人の同情をひいた。聞一多は、米国教育の下で成長した時代の学者といえよう。1912年、13才の聞一多は、米国が義和団事件の賠償金を基金として、中国人学生をアメリカに留学させるために

作った「庚子賑款制度」によって清華学校に入学、1922年卒業後米国に留学し、西洋美術を修め、欧米の詩歌を習い究めた。1925年に帰国後、北京芸術専科学校、呉淞政治大学、中央大学、武漢大学、青島大学、清華大学、西南聯合大学教授を歴任しかつ教務長、補導長、文学院長、学部主任などの職務を担当した。聞一多の基本的な興味は現実政治とははるかに隔たっており、米国留学のごく短い期間における政治活動以外は、数十年来ずっと学術文化両方面の研究に専心してきた。朱自清によれば聞一多の初期の人生は“指導的に地位にある新詩人であった”[6] 郭沫若いわく、聞は“卜辞金文と先秦文献研究に関しては国内有数の専門家であった。聞一多について語るときに人々が思い浮かべるのは、その詩集『紅燭』、『死水』であり、彼が同志とともに創立した「規律派」として知られる新詩であり、胡適、徐志摩、梁実秋などと不可分の“新月派”であり、彼の楚辞、詩経、唐詩に関する学術著作についてである。当然ながら少数の人々は彼が若い頃に熱心な国家主義者であったこと、大革命直前に彼が中国共産党及び国民党左派と正面から衝突したことを知っているかもしれない。しかしながら人々は聞一多が「九一八事変」「一二九運動」「西安事変」などの事件に際して政府と一致した態度をとっていたこと、すなわち抗戦中期においても、彼がまだ蔣介石を民族英雄と考えていたことも知っている。

聞一多の死は、当然ながら彼の明らかな左傾化と直接関係があるが、しかし人々はみな聞一多の左傾化は情勢の逼迫から生じたものであると考えた。多くの人間と比べて、聞一多は政治への関心が薄く1944年の秋に至って初めて書斎を出て政治へと向かった。この時期はまさに多くの知識人が現実政治に向かった転換点でもあった。

1944年は抗戦勝利の前年であり、国際社会反ファシスト戦争の情勢が相当好転し、ヨーロッパでは連合軍がノルマンディーに上陸し、太平洋上では米軍が島伝いに進攻し、残存していた日本軍を壊滅、東京を含む日本本土は米軍の空爆を受け、ビルマ戦でも戦局は順調に展開していた。しかしこれと鮮明な対比を成していたのが中国の戦場で、武漢を失って以来最大の軍事的危機に直面していた。4月以来、国民軍は日本軍の「一号作戦」と湖南攻勢の打撃の下、鄭州、許昌、洛陽、長沙、衡陽、柳州、桂林などの戦略要地を次々と失っていた。12月初めに日本軍が貴州省独山を占領した時には平漢鉄路南線と粤漢、湘桂鉄路はすでに失われ、140あまりの都市および7つの空軍基地と36の飛行場が敵の手に落ちていた。なんとわずか8ヶ月のうちに、日本軍は中国の6000万人あまりが居住する20万平方キロメートルの国土を侵略してしまった。大西南地区最高の天然の障壁である貴州省独山の陥落は、西南の大後方が危機にさらされたことを意味したのである。当時重慶の国民党と政府機関は蘭州、雅安に先遣人員を派遣し、移転の準備をすすめていた。また米ドルの為替レートが猛烈な勢いで上昇していたことが、人々が皆避難しようとした理由である。比較的長期間平静さを保っていた昆明もこのときばかりは“人々を不安に突き落とすデマがあふれて”おり、米国戦時情報所とその機関は慌しく非軍事人員に“不測の事態に備える”ためピストルを配布した[7]。湘桂戦役の最後の段階では百万にのぼる難民が潮の

ように大後方に疎開し、鉄道沿線に備蓄してあった大量の物資はほとんど尽き、人々は“大潰敗”という言葉で社会の混乱を表し、民間には憤激が急速に広まった。国民党のある下級軍官でさえ“我々の国土がすでにどれだけ失われてしまっただろうか？どれだけの同胞が塗炭の苦しみを味わっているのだろうか？我々は未だに失地回復できないばかりか、まだ引き続いて「与え」或いは「失」っている。我々軍人は、誠に祖先と同胞の前にひざまずいて謝罪せねばならない”[8] このような危急の情勢下にあって、西南地方政権はしきりに自衛をはかり、雲南省政府主席の龍雲は人々に広西省の教訓を吸収し“老若男女を問わず、本省人外省人を区別せず”、みな“作戦にそなえ”“自衛に備え”“犠牲に備える”ことを呼び掛けた[9]。12月1日、川康綏靖公署主任の鄧錫候は四川臨時参会の開幕式辞の中で、“軍隊訓練を強化すること”と“民衆武力をうち立てること”を研究できるようにするため、まず会議を戦時参議会に改正することを提案した[10]。このような局面に対して、蒋介石は“八ヶ月来、国土の喪失は広がり、戦地での同胞離散の苦痛は深く、国家が受ける恥辱は重く、じつに第二期抗戦史上もっともつらい一ページである”、この一年の国内状況の艱難と危険を“抗戦八年の間にみられなかったばかりか”、また国民党の50年来の革命の歴史上“いまだ遭遇したことのない危地である”と認めざるを得なかった[11]。

1944年9月、国民参政会第3期第3次会議が開かれ、“河南・湖南・広西の大潰敗”が会議の中心議題として検討された。そこでは正面戦場の軍事的失敗は、国民党が一党専制を堅持して抗戦に消極的であり、統治の腐敗がおこっているからだ、という一致した認識があった。かなりの知識人がこうした情勢の下でしだいに変化していった。聞一多もそうした知識人の中の一人であった。相違点と言えば、学究肌の聞一多の変化は人と比べてすばやく、さらに突出していた、と言うことである。半年前には聞一多は民衆同盟に参加しようとはしなかったが、秋には“今は母屋が焼けている時だ、みなで鎮火に当たらなくては”と述べていた。このように彼は民主運動に身を捧げ、中国民主同盟に加入し、かつ民主同盟の雲南省支部責任者の一人となった。民主運動の中で、聞一多は激烈な言論を少なからず発表した。大勢の面前で蒋介石を名指しで厳しく糾弾したこともあり、甚だしくは国民党第5軍軍部座談会場において“現在ただ一つの道だけがある—革命だ”と述べた。しかし、人々は彼のことを、書生が公開の場所で衆目の認める事実をしゃべるように、詩人気質からの義憤に駆られてそうするのだと理解した。加えて、このようなことは言論自由の原則を越えてはおらず、せいぜい左傾的色彩が鮮明なだけであった。

まさに聞一多その人の人生の特徴から、多くの中間知識人、とくに学術教育界人士は彼が暗殺された事実をどう受け止めて良いかわからなかった。聞一多暗殺の情報が北平（北京）に届いたとき、教育界とくに“清華の教授は更に驚愕した”、“聞教授を良く知る少なからぬ米国国籍人士はただ互いに‘これは一体どういうことなのか？’と尋ねあっていた”[12]。

「大公報」は“聞一多の死、各方面に衝撃”の一語を用い[13] この事件に対する人々の驚き、いぶかり、憤怒など様々な、正確にはとても表現できない情感を伝えた。聞一多と親

しくつきあっていた友人や同僚はとりわけ激した。清華大学中国文学部長の朱自清は“このような卑怯で凶悪な手段では、この世界は一体どうなってしまうのだろうか”と悲憤を表明した[14)]。楊振声教授は“私はつらくて話すことも出来ない。ほかの友人も同じであろうと信じている”[15)]。胡適、薩本棟、李済、梁思成、傅斯年もまた弔電のなかで“痛悼に堪えない”と表した[16)]。沈従文教授はまたこの事件を“実に国家の将来に、より大きな不幸が起きることを象徴している”とし、孫文も“まさか本当に死んだのか？”と反問せずにはおられなかった[17)]。7月18日には重慶九社の新聞が一斉に聞一多の次男、聞立雕、三男の聞立鵬の「誰が私たちの父を殺したのか？」という文章を掲載した。この尋常ならざる現象に対し、天津「大公報」は特電を発した。“重慶16社の新聞のうち9社が18日同時に聞一多の子息、聞立雕、聞立鵬二人の書いた「誰が私たちの父を殺したのか？」の一文を掲載した。この文章を掲載したのは、「時事新報」、「世界日報」、「商務日報」、「新民報」、「新華日報」、「民主報」、「国民公報」、「西南日報」、「大公報」であった”。ニュースはさらに、この現象は“世論から社会は一致して聞一多氏の不幸に同情している”ことを証明している、とした[18)]。

聞一多の暗殺にショックを受けた人間の中で、西南聯合大学常務委員、清華大学学長の梅貽琦教授はおそらく最も衝撃を受けたであろう。学校の秩序を維持する一人の学長として、梅貽琦はかつて聞一多に対して、近年の彼の社会活動には全く賛成せず、蔭で聞について“まことに革命理想家で、その見解言論は扇動的である”しかし“現実に即しているとは限らない”し、また“陰謀者に利用されることがさけられない”と評した[19)]。しかし、蔡元培の自由主義教育を大変尊敬している梅貽琦は国民党の専制的な教育政策について非常に反感を持っていた。故に学校を維持することを目的に、政治的見解が異なる同僚を幾度も保護した。1946年2月、梅貽琦は重慶で教育部部長の朱家驊を訪問、面会し、朱は談話の中で張奚若、聞一多、潘光旦など急進派の教授たちの“挙動が清華にとって特に不利になる”と表現した[20)]。6月25日、李・聞事件発生の三週間前、蔣介石は南京で梅貽琦と会見し、清華大学の状況を尋ねた。梅は朱家驊の話の内容から蔣介石の意図を推測しており、そこで一面において“清華教授の中で近頃、言動が穏当でないものが少なからずいる”と認めながらも、“大多数の同僚は深く気に留めてはいないし、そのうちに同僚が忠告するだろうから大きな影響を与えるには至らないと思う”と言い添えることを忘れなかった。梅貽琦は またすぐに“この人々はこれまで学術上かなりの業績をあげてきた。最近の言動は一時の衝動であると思うので、忠告を通じて自ら目覚めることを強く希望する。そうすれば後々の結果はかならずより良くなろう”と説明した。梅貽琦が示した“言動が穏当でない”者とは、明らかに朱家驊が言及した聞一多と潘光旦、張奚若などを含んでいた。しかし梅は彼らの変化は経済方面に落ち着くだろうとした。“この数人にはなおまだ原因がある。すなわち家族が多いあるいは病人が居る、ということで生活が特に困難であること、また彼らは他人と同じ様に外で仕事を探すことも欲しないため、鬱屈した思いが積もり、

それがいったん外にでると怒りはさらに強くなるのである”。梅貽琦のこの気遣いは確かに一定の説得力があった。経済状況が極端に悪化すると民は生活のよりどころがなくなり、ある人々の国民党に対する不満の重要な要素となることは疑いもない。しかし聞一多、潘光旦、張奚若などの知識人は表だって国民党統治に反対しており、それは経済問題の原因から出されたものでは全くなく、知識人としての伝統的使命と責任感からそうした振る舞いに及んだのであった。

梅貽琦はこの点を理解しなかったわけではないが、彼の目的はただ政治的要素を薄くし、蔣介石の反感を緩和することにすぎなかった。そこで話し終わると、彼は特に注意して蔣の表情を観察すると、“かなりうなずいているよう”に見えた[21)]。蔣介石の“うなずいているような”態度は、梅貽琦を安心させたので、聞一多のニュースを聞いたときには“どうしようもないほどの驚き”の心境に達した。彼は日記で“近頃状況はきわめて良くない。これに類することは李の後もまた続けてまた起こるだろうし、一多の近年来の行動はそれを招くおそれが最も高かった。ひとたびことが起きてしまい、またそのときの状況を調べてみると、多くの人間に包囲攻撃され死に追いやられている。これは何という恨み、何という陰謀、殊更に人を苦しめし恐れさせるものだ”[22)]。

以上は、社会の反応のほんの一側面にしか過ぎないが、人々の聞一多暗殺事件への反応を証明するに足るものである。これらの反応が、1946年の転換期に中国知識人の思想転換を促す要因となった。事実、西南聯合大学の教師と学生が後に国民党をうとんじついには離党し、中国共産党に接近する方向に転じたことも、まさに聞一多の死に刺激を受けて始まったことであった。

## 二、米国の態度

1946年の政治協商会議閉会の後、国共間では東北問題を巡って競争と交渉が続いており、この交渉の推進者が戦後極東利益に着目していた米国であった。数ヶ月にわたる一方での話し合いと一方での戦いの中で、国民党は戦果が相当程度上がるにつれて、交渉の条件をどんどんつりあげた。蔣介石が志を遂げようとしていた、まさにその時に李・聞暗殺事件が発生するとは誰も予想し得なかったのである。この事件により、独裁専制統治の暗黒面が再び暴露され、またこれは“自由民主”の米国にとってがまんできないものであった。

事実はこのようであった。李・聞暗殺後、いくつかの外国メディアがただちにこの事件とファシズムを結びつけた。上海の英文新聞「ザ・チャイナ・プレス」によると“民主同盟のリーダー李公樸と聞一多が暗殺されたことは我々に、日本、ドイツ、イタリアのような集権主義の統治下でしかそのような行為は起こり得ない、ということを感じさせる”[23)]。上海で影響がある別の英文「チャイナ・ウィークリー・レビュー」によると、“ファシスト国家だけがよく用いる方法で、歴史的にはヒトラーのドイツで一時有効な武器であった。しかし長期間でみるならかえって敵対勢力の力を増しただけであった。我々が特に強調し

たいことは、もしも中国が真に民主国家になろうとするのならば、このような方法は言うに及ばず不適当である、ということだ”[24]。国外の反応もまたこれと同様で、英国の「タイムズ」紙の社説では、“国民党の中には、日本の侵略を恨むより共産党の人間をいっそうひどく恨む層がどうしてもおり”、“民主同盟は不断に民主連合政府を建設することを主張し、それによってこの集団の憤怒をひきおこしてしまった”、そこで民主をあがめ尊ぶ自由主義者の李公樸と聞一多が暗殺されたので、きっと“中国の悲しむべき内戦のもうひとつの悪い要素となるであろう”[25]。米国とカナダで六千名ものプロテスタント牧師を代表する米国の雑誌「プロテスタント・マガジン」は、“すべての正直な米国人はみな、貴国の民主リーダー暗殺に非常に深い驚きを感じています。”、“この巨大な陰謀は、中国人民に反対するばかりではなく、同時に世界人民に反対するものであります”、と厳正に表明した。全米の聖公会の牧師信徒を代表する雑誌「クリスチャン」は、“中国政府が民主を排斥するという事実”に対して“深い驚きとおそれ、反感を覚える”と表明した[26]。

戦後の極東でソ連と拮抗している戦略計画に従って、米国は中国において安定した政府を手助けする必要があり、この役割は国民政府に振り向けられたのであった。手助けするための重要な条件の一つは、むろん経済・軍事などの援助であった。しかしながら李・聞両事件が発生したため、もともと蔣介石政権に反感を持っていた米国世論は騒然とし、多くの団体は対華援助を停止するように要求した。「ニューヨーク・ポスト」紙は20日の社説でマーシャルが蔣介石に対して“ただちに暗殺を政治的武器とすることをやめ、内戦の脅威を取り除くよう決心する”ように申し入れることを提案した。さもなければ“米国は対華借款を断絶する”[27]。米国ハーバード大学、コロンビア大学及びニューヨーク市などの大学53名の教授は、連名でトルーマン大統領、アチスン国務長官代理、及び上下両院に書簡を送り“米国学術界で驚愕しないものはない”と指摘し“米国政府はただちにその駐華軍隊を撤退しなければならない”、かつ“中国が民主的な連合政府を成立させるまで、米国は中国に対する一切の軍事及び財政援助を停止すべきである”ことを要求した[28]。コロンビア大学教育学部の教授たちは、またトルーマンに電報を送り、その中で李・聞暗殺についてこう描写した。“これは若干の反動分子の残酷行為から出たもので、米中両国の自由思想を持つ国民の良心を傷つけた。これは中国情勢が急速に悪化していることを浮き彫りにしており、米国もそれに深く巻き込まれてしまった”[29]。

上述の世論はマーシャルの調停に影響を与えた。米国の外交文書には、昆明の米国領事スプラウスが当時大使館に当てた報告が保存されている。報告ではこのように指摘されている。“李暗殺後、大学の開明人士の強烈な糾弾を引きおこした。しかしながら、彼らは自分が脅威を受けていることを信じなかった。そこで皆、李は徹底した政治活動家であり知識人だとは思っていなかった。彼らは自分もまた危険な目に遭う警告を受け取ったにもかかわらず、この感覚がまだ残っていた。しかし、そこへ聞一多が暗殺され状況が完全に変わった。なぜならば聞一多は開明人士の中では抜きんでた人物だったので、知識界では

高く尊敬されていたからである。聞はかつて政治に全く関心がなかったが、二年前から突然中国の政治情勢に強い関心を抱くようになった。続いて、彼は民主同盟に参加し、民主同盟をもっとも雄弁に代表しうる人士の一人となった。同時に、昆明で大学にいる時、彼の影響はいかなる人と比べても大きかった"[30]。我々はマーシャルがいつこの報告を見たのかはわからないが、一点だけ確かなことは、彼は李・聞が暗殺されたことを知ったときにただちに一種の圧力を感じた、ということである。

報告が次々と伝わっていく中で問題が発生したかどうかはわからない。また資料それ自体に欠落があり、現存する記録によると、マーシャルは7月16日に昆明の領事館から李公樸暗殺の知らせを受け取り、幾名かの雲南民主同盟の責任者が領事館に保護されるとの報告を受け取ったが、いまだ聞一多の暗殺情報は得ていなかった。昆明領事館の保護措置は中国への内政干渉の疑いがあったので、マーシャルは昆明領事館にこの問題は国民政府と協商を進めるよう申し出たばかりであった。しかしながら、彼は問題がこのように複雑であるとは思ってもいなかった。

7月17日の午前、マーシャルと周恩来は南京の海寧路5号で会談し、マーシャルは周恩来から聞一多の暗殺のニュースを知ったのであった。その時、周はこのことに話が及ぶと興奮し、こう述べた。"聞一多は米国に留学したことがあるばかりか、詩人であり胡適の友人でもあった"。周は問題をこのようにして、中国自由主義精神のリーダー胡適の態度を引き合いに出して、聞一多暗殺事件の重要性を強調するつもりであった。マーシャルは聞一多が李公樸に続いて暗殺されたというニュースを聞いて非常に驚きいぶかり、自分も周と"同じく驚きかつ憎悪する"ことを隠そうともしなかった。しかし、西洋的感覚で推論することに慣れていたマーシャルは、国民党は"この種のことを氾濫させたらどういう結果になるか知るべきだ"と考え、同時にまた"米国大使館の行動は李と聞の生命を取り戻すことは出来ないものの、しかし世論が騒ぐこと、特に外部の強烈な反応は避けがたいので、類似事件が続いて起こることを阻止するために強く団結することになるだろう"。当時マーシャルは李・聞事件を蔣介石と直接関連づけないよう希望しており、"暗殺の原因は地方の怨恨によるものなので、地方で決定するよう望む"としていた。もちろんマーシャルはけっして蔣介石のための保証をするつもりはなかった。彼は"中国に来たばかりの頃、学生がそこらで殺害されていた"ので"昆明で遅からずこのような問題が起きる"ことを十分に知っていたからであった[31]。

李公樸、聞一多が続いて暗殺されたことは孤立した事件ではなく、周恩来はマーシャルに政治協商会議の開催以来、重慶較場口事件、新華日報社がたたき壊されたこと、また西安、南通、下関などの一連の事件が発生したことに注意を促し、あわせて"全国の特務が手はずを整えているので、決して昆明だけで終わらない"、"例えば重慶の鄧初民、史良、上海の沈鈞儒、羅隆基、などがひとしくブラックリストに載っている"。そこで、もし事件が公正に解決されず、この種の暴行が続くのであれば、民主的人士は共産党地区に逃げ

込むだけであり、その他の人間も努力を放棄するであろう。ここまで話すと、周恩来は“中国の最大の悲劇は中国人が自分で自分の生命を守る能力がないことである”そして、“ある人に言わせれば、唯一の希望は米国の保護を得ることである”から、米国は責任を負う必要があると強調した。さもないと、“民主運動を保護するために、ある人間がまた別の調停総本部成立を提案するだろう”。周が言った“また別の調停総本部”とは、連合政府かその他の民主政権を暗示していた。マーシャルはこの点は非常に良く理解しており、そこで補って解釈する口ぶりで“言い換えれば、一つの組織が消滅すると、また別のものが必ず生まれる、ということだ”と述べた。会談終了前、マーシャルはレイトンと昼食を共にするとき昆明でどんな報告があり、どのような相談ができるのかを見てみると述べた[32)]。会談後、マーシャルは直ちに米国国務長官ベーナスに李・聞事件を総括報告した。

資料によると、マーシャルは当時、蔣介石に李・聞事件について調査し処分することを決定した。周恩来と会談した17日の午後、マーシャルは新任の駐華大使レイトンと共に南京から牯嶺まで飛び、そこで避暑をしていた蔣介石と会見した。この時マーシャル等調停者は初めて廬山に登ったのであるが、その目的は停戦問題について意見交換することであった。しかし会談の中心は知らず知らずのうちに李・聞事件に移った。その時マーシャルは蔣介石に李・聞事件は、中に立って調停する米国にマイナスの影響を与えると慎重に指摘し、かつ“この度の暗殺は中国のもっとも教養のある人間に向けられたもので、その中に米国の大学を卒業した人間がいる。米国人は彼らの貢献と、内戦で戦っている教育程度があまり高くない軍事的指導者とを比較するだろう”。だから米国世論は“対蔣不利”と認めるのである[33)]。7月18日午前、マーシャルは蔣介石と継続して会談を進める中で、また“幾度もきわめて平静な口ぶりで昆明の二度の暗殺事件及びそれらが米国世論に影響をもたらす可能性があることを持ち出した”[34)]。同じくレイトンもきわめて率直に“政府はすでに知識人と大衆に呼びかける力を失いつつある”、なぜならば“最近の暗殺がきわめて大きな恐怖をもたらした”からで、“人々はあまねくこれが政治思想と行為に対する圧政の開始だと認識している”。これにより、レイトンは蔣に三箇条の措置を採ることを提案した、すなわち“一．中央政府は暗殺に反対であることを公開声明として出す。二．新聞に対する規制を解除する。三．政治協商会議を開き、立憲政府建設のきっかけとする”[35)]。

もしもマーシャル、レイトンの批判がまだ公開されていなかったのならば、昆明領事館の昆明における民主指導者への保護措置は報道の端々にしばしば見られただろうし、客観的に李・聞暗殺事件の深刻さは波乱を大きくする伝播作用があったであろう。

梅貽琦は聞一多暗殺の当日に教育部に電報を送り、その中で、“同僚は極度に恐れています”とこの種の公開文ではみられない字句を用い、西南聯合大学における同僚の当時の心理状態を正確に反映させた[36)]。事実、7月15日の聞一多暗殺の夜、昆明領事館はジープ車で潘光旦夫妻、費孝通夫妻、張奚若等を領事館まで迎えて保護しようとしていた。7月16日、梅貽琦は“米国領事館に光旦、奚若に面会に行った”時、“そこにはすでに17、8

人居たと聞いた”。ただし梅の記録はあまり正確ではなく、その時米国領事館の保護を受けていたのは実際には11人であった。その中に雲南大学の教授楚図南、尚鉞、馮素陶、講師の王康等の人々が含まれていた。7月18日の晩、潘光旦、費孝通などは一度領事館を離れたが、しかし時局が緊張していたため、21日に再び米国領事館に戻らざるを得なかった。

米国駐昆明領事館のこの保護措置は、29日に米国のAP通信社が事実であることを証明した。ニュースのトップで“昆明の領事館には確実に11名の民主同盟の人間が保護されている”と明かし、続いて、“国務省の声明では、昆明米国領事館がこの種の措置を採った理由は”これらの人々が“明らかに暗殺される可能性があるからで”故に“南京米国大使館はすでに中国外交部とこの問題を話し合い”、ひとたび各人の“安全が十分に保障されれば”これらの人々は“米国領事館の保護を離れるであろう”[37]。昆明領事館の非常措置は、明らかにその外交職権を超越しており、そのため、昆明副領事はとくに大使館に対して、領事館の人間は国民党が“すでに昆明民主同盟の指導者を暗殺すると決定した”と信じており、かつ雲南民主同盟の支部委員楚図南などがブラックリストに入っていたため、これらの人々には保護が必要だと考えた、と説明した。報告ではさらに、“証拠からみて、暗殺は綿密に画策されて行われ、かつ継続する予定であった。反動分子は最終的には自由党との妥協を気にかけている可能性があり、最後にどの様な政治的結果が生まれようと、彼らを徹底的に消滅する必要があることをすでに決定していた”、よって反動分子は“昆明の暗殺は南京、上海や北京のように政治に巨大な危害を与えることはない”と考えているのである。この判断に基づき、領事館は幾つかの応急方案を提出し、その中に国民党政府に対して“テロ活動を停止すること”、“人身の安全を保障すること”、“民主同盟及びマーシャル将軍に調査人員を派遣すること”を要求した[38]。この越権行為に対し、マーシャルはもちろん、レイトン、また米国国務省も批判しなかったばかりか、逆に認可を与えた。米国のマーシャルの調停文書では、ベーナスが米国大使館に通知した、“もし必要なときには、継続して保護を与える”というはっきりとした意見が残っており、また昆明領事館や、南京大使館と米国国務省の間で取り交わされた、雲南民主同盟責任者の保護についてどの様な措置をとるかという往復書簡が保存されている。

昆明領事館が李・聞事件後に直接介入したことは、疑いもなく李・聞暗殺で引きおこされた緊張した空気を増加させた。7月18日、雲南警備総司令霍揆彰がそれら関係人士の保護を命令されたとき、誰か昆明を離れるのであれば必要条件を提示せよとの命令もあった。23日午前、マーシャルと周恩来の会談が開かれている間、彼はずっと昆明領事館を通じて事態の成り行きに注目しており、また行政院長宋子文もまたすでに雲南省政府主席盧漢にそこで発生する全ての責任を負うように指示を出した。

## 三、国民党による事後処理

中国共産党、民主同盟と国内の各階層の強烈な抗議とマーシャル及び米国世論の態度に

より蔣介石は針のむしろに座ることとなった。当時、蔣の関心は主に東北問題の軍事的解決に注がれており、そのために一刻も早くこの局面を打開する必要があった。また前述のレイトンが示した三つの項目のうち、李・聞事件を処理するのが相対的にまだ簡単であった。もしもこのような事件が続いてそれらがみな処理できなかったのならば、人心を掌握できないばかりか、将来民主同盟との対立を推し進める結果となってしまうからだ。蔣介石は国内で中国共産党と駆け引きをするならば、民主同盟を仲間に引き込む必要があり、また国際的にも四大戦勝国の面子を保つ必要があったので、李・聞事件を処理できないことは得るものより失うものの方が多かったのである。これらのことから蔣介石は行政院に訓令を発し、各地で“政府は地方の治安を維持する”、“人民生命の安全と自由”に責任を持つよう命令した[39)]。

李・聞事件発生後、全国各界は犯人を捕え、主謀者を処罰せよと強烈に要求した。聞一多暗殺から三日目、17日の早朝、重慶飛行場から北に集まった西南聯合大学の教授湯用彤、金岳霖、葉企、周炳琳、黄子卿、湯佩松、姚従吾等三十四名の教授が連名で教育部を通じて国民政府に書信を宛て、“聞先生が中国文学でなした功績はきわだっており、世代で傑出した才能を持っていた。これが残酷な手段で葬られるとは、正義はどこにあるのか、法律制度はどこにあるのか、同僚たちは悲憤と驚愕に堪えない。悪がとらえられ必ず審判に附され、主謀者が厳重に取り調べられることを祈る。”としたためた。手紙ではまた“政府の道徳上、法律上の責任は決して避けられるものではない。政府の人員はまた自らを曲げてかばうことはできない”、政府は“迅速な処理をもって、公憤を鎮める”必要があるとした[40)]。かつて教育部次長、国民参政会副秘書長をつとめた周炳琳教授は、さらに“この事件を明白に追求すべきで、誰が実際に指図したのか、殺させた人間に責任を負わせるべきである。決して追悼会を開き、死んだ人間についてのお悔やみの文を書き、文章を書いて都合よく終わらせてはならない”と主張した。彼はさらに梅貽琦に手紙を書き、梅に雲南警備総司令霍揆彰に“責任が帰する所、いい加減は許さない”とはっきりさせる旨を伝えた[41)]。胡適、薩本棟、李済、梁思成、傅斯年などの聞一多の友人はまた、連名で出した弔電の中で“すでに政府当局は厳しく暗殺者を取り締まり、事件を調べて明らかにし、法による処罰を尽くす方向に向かっている”と書いた[42)]。

国民党の統治集団内部では、中共問題を政治的に解決しようと主張する者の中で、暗殺手段を採ることに不賛成である人間もいた。例えば国民参政会主席団主席の一人、国民政府外交部長王世傑は“徹底調査を強く主張”した。彼は内政部長の張厲生が関わっている可能性への疑いまで持っていた[43)]。暗殺問題を解決する上で、中間層が従来通り一定の比率を占める国民参政会駐会委員会の態度も同じく積極的であった。7月19日の午前、江庸が司会する（重慶から南京への）還都後開かれた第6次会議で、華西女子大学学長の呉貽芳等の提案を通じて、“政府に厳しく注意を促す”決議を出し、“雲南省政府に速やかに昆明暗殺事件の犯人を処理する”ことを要求した[44)]。

現在持っている情報に基づいて、蔣介石はこのことは彼自身がやることであるということははっきり理解していたが、しかし詳しい事情は理解していなかったので、廬山から“南京まで長距離電話をして毛人鳳に責任を問うた”が、しかし毛も“誰がやったかわからない。ただこれを人にやらせてはいないとしか言えない“と答えた[45]。

7月16日晩、呉鉄城と任命されたばかりの内政部警察総署署長の唐縦に会い、李・聞事件の処理問題について相談したが、彼らはみな“どこから手をつけたらいいのかわからな”かった[46]。17日、呉、唐は国防部長陳誠を国府に招いて会合を開いた。陳誠は昆明の治安を担当する雲南警備総司令霍揆彰の直接の上司であり、彼は李、聞事件に関して“軍は絶対に無関係である”ことを示すため、“このことは霍揆彰がなすところにあらず”という方針を堅持していた。このように、三人は会談でも何も結果を出せず、最後にかろうじて、そのとき東北で軍事視察をしていた雲南省政府主席盧漢に電報を打ち“雲南に帰り調査解決の処置をとれ”と促した。陳誠は霍のために弁解はしたものの、心中は計り知れない様子で、そこで国防部秘書長顔宵鵬を7月18日犯人逮捕解決のため昆明に飛行機で行かせた。

17日の晩、唐縦は蔣介石から、“昆明に出向き事件解決をせよ”との命令を受け取り[47]、そしてその友人で“この事件の扱いにくさを感じない者”はなかった[48]。唐は手を焼くことは承知であったが、比較的経験のある国民政府軍事委員会調査統計局の上海臨時辦事処所長の程一鳴が直接昆明に乗り込んで手伝うことになったので急がざるを得なかった。同時にまた“昆明から四川経由で犯人が逃走し上海に潜伏することをふせぐ手はずを整えよ”と命令を下した[49]。これらが落ち着いた後、唐は20日に出発した。調べるうちに霍揆彰が関わっている疑いがまた頭をもたげてきたので、進中の貴陽に滞在した。22日、唐は暗殺工作室を管轄する軍事委員会調査統計局（以下、軍統局と記す）第三処所長鄭修元からの電報を受け取った。電報には李・聞事件と雲南警備総司令部が関わっていると書かれており[50]、これでやっと23日に沈醉（軍統局総務処所長）、李肖白（軍委会郵航検査処所長）、鄭修元、許建業（中美合作所汽車総隊隊長）など特務の頭目を伴って昆明まで飛んだ。唐は昆明に到着したその日、李毓楨（雲南省警務処所長）、龔少侠（昆明警察局長）、王巍（軍統雲南支所長）、などにすぐ李・聞事件の内幕を報告した[51]。王巍は報告して、軍統局は“雲南駅昆明組はすでに李・聞を暗殺した6、7名を調べ上げると、全員当時の雲南警備総司令部特務大隊と検査処の人間で、暗殺者の職務、姓名と事前の割り振りおよび暗殺の状況などもすでにはっきりとさせた”[52]。ここに至ると真相はすっかり判明したと言うべきであるが、唐と霍が面談したとき、しかしながら霍はきっぱりと否定した。

これと同時に、23日蔣介石は廬山で東北から来たばかりの盧漢と会談し、盧漢はただちに雲南省政府に、上司の指示に従い適切に調査せよとの電報を送った[53]。このとき霍揆彰はまだ裏で欺瞞工作をし、罪を地方人士になすりつけようとして龍雲系統の昆明で軍営をしていた副官長、楊立徳を逮捕した[54]。霍抵頼、唐縦はどうしようもないので、ただ状況を蔣に報告し、蔣はただちに霍揆彰に廬山に来て報告するように電報を打った。25日、霍

は飛行機で廬山に赴き、不承不承、李・聞事件は部下の所業であることを認めた。蔣は理解した後“大声で霍揆彰をきちがいと罵った”、これは二名の民主人士を暗殺したからではなく、手を下すにはあまりにもまずい時期だからであった。霍は蔣に罵られ、責任を回避するため、“昆明の検査処に関係者の逮捕を手紙で指示し”配下を“胸を張って烈士となる”ようにした[55)]。

内政・外交にてこずっていた蔣介石は、急いで李・聞事件の解決をはかり、これは26日陸軍総司令顧祝同と陸軍総部参謀長冷欣、憲兵司令張鎮などに全権を与え問題処理の為昆明に派遣した。7月27日、顧などと盧漢は霍揆彰と同じ飛行機で昆明に飛んだ。

後日わかったことだが、これは、あらかじめ謀られていた暗殺の事実上最初のものであった。すでに5月に、霍揆彰は検査処の所長王子明に命じて4班の諜報グループを組織させ、50名以上からなるブラックリストを作成していた。6月28日には、霍はこのリストを南京まで持っていき、国防部長陳誠の所で情報を集め、蔣介石の裁可を得てすぐに実行に移すばかりとなっていた。当時蔣介石はマーシャルと会談しており、霍揆彰と接見する時間がなかったので、霍はリストと行動プランを国防部に預け、昆明に戻り命令を待っていた。7月5日、霍揆彰は国防部から“便宜的に処置せよ”との秘密電報を受け取り、翌日ただちに警備司令部警務処、検査処、交通部運輸局検査組、憲兵十三連隊、中統雲南支所、昆明市警察局責任者を召集し会議を開き、彼らに手分けして行動するよう指示を出した。暗殺手段に至っては、当初の計画では生き埋めにするはずだったが、李公樸暗殺を担当する趙鳳の第11行動組が功を争って銃殺してしまった。このように、崔鎮山の第六行動組もまた聞一多を狙撃することに決定し、ただちに李明山、崔宝山、劉錫林、何毅に計画を実施し、曾海涛、欧陽天化、蔡雲祈、尚福海、秦永和、仲剛、王開基などの特務に連係作戦をとるよう命令した[56)]。霍揆彰の殺人の動機に関しては、沈醉によれば蔣介石に取り入るためで、手柄を立て、省主席ぶってうまい汁を吸おうとしたのであった[57)]。しかしながら、国民党が反共反人民の立場を堅持するかぎり、李公樸だけでなく、聞一多などおよそ民主を主張するすべての人士がこの時期に“屠殺用刃物の脅威の下に置かれて”いたのである。

国民党は、聞一多暗殺事件に対して世論の圧力で応じてやむなく後始末を行ったので、この事件の徹底解明は全くできなくなった。これは以下の二つの措置からはっきりと見て取れる。

第一に、李事件を棚上げして、単独で聞事件を処理しようとしたことである。李・聞事件はもともとひとまとまりで発生し、かつ霍揆彰が早くから暗殺リストに載せる前に、彼らはすでにほどなく葬りさられる対象となっていたのであった。1946年初、李公樸が重慶較場口事件で暴徒に殴られ負傷した。また特務の計画によれば、本来は彼を涸れ井戸に放り込んで殺す予定であったが、当時周囲にあまりにも人が多かったので、手を下せなかった。聞一多に対しては、この年の5月に昆明近日楼附近では、彼の首に40万元の賞金をかけているというビラが貼られた。もしこれがまだ脅しであったならば良かったが、霍揆彰、

王子明などの作ったブラックリストは実在のものであった。李公樸暗殺後、世間ではすでに第二の暗殺対象は聞一多だとする風評が立っていた。7月13日の晩、一人の友人がその夜聞一多一家を訪れすぐに慌ただしく彼に、霍揆彰の暗殺リストは確実だという警備部内部から漏れ出た情報を伝え、聞一多に外に出ないように言い聞かせた。14日、雲南大学教授、潘大逵は必死で聞一多を探し出し、彼にブラックリストのことを伝えた[58)]。その日、聞一多が住む西蒼坡の雲南聯合大学宿舎の門前に、ずっと怪しげな人間がいったりきたりしており、一度などは特務が入ってきて、中庭の子どもに“聞一多はどんな様子だ、洋服を着ているのか、それとも中国服か、髭はあるのか”などを聞いた[59)]。これらは全て暗殺計画中の必要なステップであったことがわかる。

しかし、蒋介石は最初から李公樸事件を枠外に排除しようとした。李公樸事件を棚上げにすることをまっさきに提案したのは唐縦で、7月28日、唐縦は蒋介石に会見したとき、“李・聞事件を二つに分け、計画的行動ではないことを示す”ことを建議した。唐は、“聞一多事件は義侠から出た偶然の行為であったことにする”、また“李公樸事件は李公樸に報復することを請け負った扇動部隊の義侠行為によるもの”と主張した。蒋介石は適当でないと考え、“李事件がもしも解決しなかったら、当分懸案となってしまう”[60)]。蒋介石の指示があったため、顧祝同は聞事件の終了後、梁漱冥に“民主同盟は大局に心を配って、小さい事情を強調しないでほしい”と述べ、かつ“李事件はなお手がかりが無く、聞事件より困難であると大勢が信じている”と述べた[61)]。このように李公樸事件は不問に付された。このことからも蒋介石が聞事件において、国内外の世論を小手先でもてあそんだにすぎないと言うことが証明されよう。

第二に、“捨車保師”(訳注:飛車を捨てて王を守る)——暗殺任務を執行した小物の特務に責任を負わせたことである。8月15日、陸軍総司令部軍法処で、雲南省保安司令部、駐昆明憲兵十三連隊合同軍事会議審判法廷で、湯時亮、李文山に対する第一次“公開裁判”が開かれた[62)]。この公開裁判では清華大学、省県参議員、市商会理事長、省党部、省政府、市政府、監察使署20余名が招かれた。新聞界に至っては、指定の中央社両記者が傍聴を許されたことをのぞいて、ずっと平和的立場を維持してきた「大公報」の記者(高学逵)は門外に拒絶された。明らかに、これは形式だけを満たすためおこなわれたもので、なるべく報道の影響を少なくするためのものであった。公開裁判中、湯時亮、李文山の両名は法廷でも尊大に振る舞い、公然と“聞一多を売国奴と言い、彼ら二人は憤慨してこれを殺したに過ぎない”とした[63)]。二人の犯人が恐れずにこのようにふるまったのは、明らかに裏で後押しする者がいたからである。当時、昆明に本来の事件調査に赴いた民主同盟中央秘書長の梁漱冥、副秘書長の周新民が聞立鶴を出廷させ犯人を識別させよ、と正当な理由で要求したのに対し、冷欣の“傷がまだ癒えてない”の一言で拒絶された。実際には、冷欣は聞立鶴が出廷した後、その他の犯人を追求することを心配したのであった。その実、梁漱冥、周新民が昆明に到着後、すでに少なからぬ人々が“内緒で、自発的に書いた手紙”

を彼らに資料として渡した。これらの人々の中には“警備部工作人員および特殊分子”も含まれていた。このほかに、米国領事館もまた彼らに少なからぬ資料を提供した。“米国大使館はすでにこの事件に関し専門の調査員を昆明に派遣し徹底的に調査し整理するため”で、“人物物証もみなある”とした[64]。このことは李公樸事件あるいは聞一多事件であろうと、事実の「真相」はみなはっきりしており、国民党は徹底調査を肯定しないことがもともと決まっていたということだ。つぎの一点は、1947年霍揆彰と沈醉が李・聞事件について語ったとき意外にも打ち明けられた事である。彼は当時“あまりに早くやりすぎた”、なぜならば“時機尚早で”、“こういった面倒を引きおこすことになった”、“もしも今まで待ってやっていたら失敗せず功績があった”と述べた[65]。

このときの公開裁判では、中央社がその日に電報を打ち、聞事件は結審可能との姿勢を示した。しかし、梁漱冥、周新民は裁判で裁かれるのはニセの犯人に過ぎず、“軽率に昆明で解決すること”に反対し、犯人は“北京に移して公開裁判にかけ、各方面が参加する”姿勢を堅持した[66]。実際、国民党は聞事件でどのような措置をとろうとも、結局は人民に敵対する態度を少しも変えなかったのであった。

不信任の中、顧祝同はやむを得ず8月25日に翠湖警備司令部で第二回目の公開裁判を開き、あわせて湯、李死刑の判決を下した。すぐ後で、顧祝同は陸軍総司令部法第一号の布告にサインをし、この判決を宣布した。判決執行前、沈醉は軍紀に違反した二名の特務を探し出し、彼らを湯、李の代わりとしようとした。これは顧が再び上手く出し抜こうとしたからであったが、その通りにはいかなかった。この裁判後、中央社は直ちに特電を発した。同日、顧祝同は、霍揆彰については免職、陸軍総部の管轄に引き渡すという蔣介石の命令を発した[67]。26日早朝、湯、李両名は銃殺刑に処されたが、世論は“二人の犯人が死刑に処されるとき、ぜったい別の身代わりがいたはずだ”と考えた[68]。

中国人民が民主権力を争奪するにあたり、聞一多が最初で最後の民主事業の献身者ではなかった。国民党統治史上、どのくらいの愛国志士が暗殺の憂き目にあったのか、みなうやむやにされてしまった。唯一、聞事件については蔣介石が直接取り組んだため、続いて大物が出て来、犯人が公開裁判で処刑された。あわせて新疆大使も処罰されたのは、稀に見ることで確かに唯一無二であった。この種の状況は、国共の軍事競争にまだ完全な決着が付かず、全国の民衆に内戦反対の呼び声が日増しに高まっている環境でしか出現しない特殊な例であった。

しかし、聞一多暗殺事件の結審は、国民党の派閥争いの道具に終わったというこの点については、今まであまり人の注意を引かなかった。周知の通り、国民党の軍隊内部には長いこと何応欽系列と陳誠系列の二つが存在し、それぞれが体系を成していたので矛盾は極めて深刻であった。1945年12月、昆明に“一二一事件”が発生し、4名の成年が国民党軍隊特務によって殺害された。西南聯合大学の数十名の教師と学生が殴打され、このことは戦後国民党統治区における初めての空前規模の反内戦運動へとつながった。事件後、蔣介

石は事態を鎮めるため、何応欽系列に属する雲南警備総司令関麟征を免職した。国防部長の陳誠はこの機に乗じて霍揆彰に手紙を出し、これにとって代わった。李・聞事件後、顧祝同が霍揆彰を追い払い、何応欽の甥の何紹周をすえたのは、まさに何応欽系列の仇討ちであった[69]。してみると聞一多事件は、事件の中に事件があったことがわかる。

国民党の聞一多事件の事後処理は特例に属するが、しかしそれにも疑惑が存在する。その中でもっとも疑わしいことは、国民党最高統治者である蔣介石が李・聞の暗殺を批准したのか否かという問題である。国民党内の重大措置は最高当局の裁決を経るのが慣例であり、第三の大政党である民主同盟の中央執行委員の暗殺は決して小事ではありえず、従って必ず蔣介石の批准を必要とするのである。まさにこの理由で、霍揆彰は暗殺計画を携えて南京まで指示を求めて飛んだのであった。今のところ蔣介石が李・聞事件の暗殺を命令批准した証拠、或いはその他の文字資料は見つかっていないが、しかし蔣がそれを黙認した可能性は排除しきれない。蔣介石に非常に近かった人物によると、蔣介石は困難で処理しにくい事件にあたるとき、たとえすでに同意していたとしても、明確に態度には表そうとせず、人をどっちつかずに感じさせたという[70]。このように、一旦問題が生じると、蔣介石は狡滑に口実を設けて責任を押しつけるのであった。李公樸、聞一多暗殺事件の時にも、そういうことがあった可能性がある。

聞一多事件は解決したものの、国民党の内戦政策は相変わらずで、一党専制制度を改めようとはせず国内情勢は悪化し続けた。このような状況に対して、米国大統領のトルーマンは口を挟まずにはいられなかった。8月10日、トルーマンは自ら蔣介石に手紙でいささかの遠慮もなくこう書いた。“私はマーシャル特使を閣下のもとに派遣して以来、中国の時局に対し終始深い関心を抱いてきました。今私は一つの結論を導かざるを得ません。”そしてこの結論とはすなわち“この数ヶ月来、中国政情は急速に悪化し、米国国民は深く憂慮しています。”その原因はすなわち李・聞の暗殺である。これについて、トルーマンは手紙の中で次のように書いている。“最近昆明で発生した声望ある教育階層人士の暗殺事件を米国国民は聞き及んでいます。この事件の責任は誰にあるのか、むろんその結果によっては米国国民が中国情勢にますます注目することになります。中国が社会問題に対して民主的方法を採らず、武力に頼り軍隊あるいは特務警察を利用し解決を図ろうとするのならば一層そうなるでしょう。” 手紙でトルーマンは特に“中国国民の期待は、これはみだりに武力に頼らぬことや少数の政治反動分子を阻止するところにあります。この類は現代の趨勢にあっては曖昧であり、国家の福利推進に対して平気でこれを阻み、この種の情勢は実に米国国民の深く嫌悪するところであります。もし中国内部の平和的解決方法が、短期間で実際に進歩しないのであれば、米国世論の中国に対する寛大で気前の良い態度が続くのは難しくなり、私は必ずや米国の立場を改めることになるでしょう”[71]。

惜しいかな、トルーマンの警告は蔣介石の既定の内戦政策を決して変えることはなく、また米国はそれにより蔣介石を支持する反共的な対華政策を改めることはなかったのであった。

## 四、聞一多の死の時代的意義

李公樸、聞一多の殉難後、全国各地と社会各界はそれぞれの形式、規模で追悼活動を行った。こうした活動を通じて、人々は聞一多の死の時代的意義を感じ取ったのである。

聞一多の母校の西南聯合大学では一連の追悼会を挙行した。7月24日、西南聯合大学名義で組織された追悼会が昆明昆華中学北院大教室で開かれた。この追悼会は主催者の梅貽琦はもちろんのこと、中国文学部の教授羅庸も聞一多の一生を簡略に報告し、弔辞を述べた黄鈺生（教師代表）、馬忠（学生代表）もみな政治問題を回避し、あらかじめ学術面の表彰に限った低調なものであった。7月27日、西南聯合大学の上海校友会は花旗銀行で聞一多の追悼会を開き、聞一多の友人である聯合大学生物学部長の李継侗が主催し、歴史学部教授呉晗、政治学部教授王贛愚、聞一多が清華学校で勉強していた時代の先生周永徳が相次いで発言をした。李継侗は悲しみに満ちて“聞先生の死は学術的な一大損失でありまた民主活動の損失である”と強調した。呉晗は“聞一多の被害は「暗」殺とは言えない、その時は午後五時三十分の昆明の街角での銃撃で、「明」殺だ”と述べた。王贛愚は“聞一多の生活態度の精神は、すなわち「誠実」、いつわりがなく、うそを嫌い、平常の語り口は勇敢で、恐れぬことを貫いた”[72]。会ではまた聞立雕、聞立鵬が全世界の公正なる人士に向けて訴えた手紙が朗読された。8月11日、重慶青年会にいる聯合大学の校友留渝は、聞一多追悼会を開き、その席で清華大学文科研究所の講師で聞一多の助手の何善周が、聞一多夫人の高孝貞と長男の聞立鶴の入院状況を報告した[73]。

全国各地の追悼会は、最初に延安で開幕した。7月26日、延安各界の万を越す人々が李聞追悼会と反内戦反特務大会を挙行し、第十八集団軍総司令朱徳、陝甘寧辺区政府主席林伯渠の講話では、全国人民が団結して、内戦反対と特務政策反対を堅持しようと呼び掛けた。

7月28日、重慶の青年館で李・聞追悼大会が開かれ、参加者は6000人あまりにのぼり、各界が送った手紙や電報は1200通あまりで、挽聯（訳注：死者追悼の言葉で、造花の花輪などに付ける）や花輪が会場の外の通りに沿った壁いっぱいに飾られた。追悼会は国民党中央部秘書長張群任主席、西南聯合大法学院院長周炳琳担任が主催し、中国共産党政協代表呉玉章、重慶市長張篤倫、重慶市参議会議長胡子昂、著名な民主人士の鮮特生、許徳珩，鄧初民、史良、沈起予などが臨席した。祭壇上には“民主之魂”の四文字が掲げられていた。両側の柏の枝には“身命を以て民主を勝ち取り、力と血で平和の基礎を固めた”という挽聯がかけられていた。周炳琳は国民政府の教育部長を務めていた人物であるが、彼の発言は真理を追求する精神を現していた。聞一多の生涯を報告するとき、周炳琳は“この三年来、政治によって人々が沈黙させられていたので、そこで彼は国家のため人民のため力を尽くして呼びかけ訴えた。自らは少しの企みもなく、議論は果敢で激烈、これによって聞先生は恨みを買い犠牲になってしまった。聞先生の学識とその人柄に私は感極まった。

現在の我々の国家活力から言っても、人道上、善悪上から言っても、我々は聞一多一個人の死としてではなく、如何に聞先生の未完の事業を我々が引き受け、続けていくかということで聞先生を記念とするのである"[74]。

8月18日、成都各界の2000人あまりが蓉光映画館で開かれた李・聞追悼大会に参加し、四川省政府秘書長李伯申が主席となり、民主同盟中央執行委員範樸齋が主催した。74才という高齢の民主同盟主席張瀾は目に涙をためて挨拶の言葉を述べ、犯人と黒幕を追求することを要求し、自己を"両同志の後塵を拝し、中国の民主平和のために力を国事に尽くして死ぬまでやめないと決めた"と述べた。会の後、あろうことか特務暴徒が彼に鉄くずや豆味噌、ビンなどを投げつけたので、張瀾は頭部を三箇所負傷し、ひどく流血した。

8月25日、香港九龍各界は孔聖堂で追悼大会を挙行した。会場に掲げられた挽聯には"執政党が民主指導者を暗殺するとは卑劣で恥知らずと言うべきだ。ファシストに反抗した名学者はまさに人民の指導者である"、"犯罪集団の怒りが賢明で善良な人間を害し、独裁を授け与えようとしている。今や群衆の力は正義に向かって伸び、かならずや民主を成功させる"と書かれていた。追悼会は"八一三"瀘淞抗戦時に国民党第十九路軍軍長であった蔡廷鍇が主席となり、彭澤民が祭文をよみあげ、薩空了、陳基瑗、丘哲、沈志遠等十余名の演説があった。会では全国に電信で、基金などの計画募集委員会を組織することや署名や告発等を行う臨時動議が発せられた。

9月15日、シンガポールの華僑1,000人あまりと43の団体が連合して追悼会を挙行した。会場の門前には高く"民族永生"の大きな額が掲げられ、祭壇上の追悼の言葉には"烈士の血、民生の花"の八文字が書かれていた。陳嘉庚の追悼の語句には"君たちは地に入り天に昇り、民主を勝ち取り、自由を勝ち取った。しかし素手で立ち向かったので、人々は血の涙を流した。私はまたひどく悲しみ恨み、独裁に反対し、へつらいに反対する。我々華僑同胞の総意を知り、救国と三強をくじくことだけを求める。"

全国最大規模の追悼大会は上海で開催された。この追悼会は、当初は民主同盟の発起によるものであったが、8月28日の準備ではすでに総務、財務、文書、交際の四チームに分かれて作業が進められ、田漢、洪深、熊佛西、黎澍、盧声広、王紹鏊、徐伯昕、潘梓年、韓明、羅淑章が責任者となった。9月13日、上海市長で、聞一多と清華学校の同じクラスの友人であった呉国幀が発起人の一人になりたいと表明した。29日、第六次準備会では主席団の成員が45人となり、その中に国民党、中国共産党、民主同盟の高レベルの人物と著名無党派人士の呉国幀、宣鉄吾、呉先開、潘公展、徐寄廎、周恩来、華崗、李済深、陳銘枢、譚平山、司徒美堂、黄炎培、郭沫若、胡政之、葉聖陶、田漢、左舜生等がいた。10月2日に準備会が再開したとき、追悼会は国民党代表呉国幀を主席とすることを決め、民主同盟中央常任委員の沈鈞儒が主祭となり、民主同盟中央委員史良、蘇図南がそれぞれ李、聞の生涯を報告することになった。最後にこの追悼会は宋慶齢、孫科が筆頭に名を連ねることとなり、あわせて167人が共同で発起した。10月4日、追悼会は上海の天瞻大舞台で

開かれ、参加者は社会各界からの5000人あまりであった。大会は著名劇作家であり、清華学校で聞一多と共同で新劇を創作、演出した洪深の演出で開幕した。呉国幀の開会の式辞の中で、李、聞を暗殺したのは法律に違反していると指摘した。上海市参議会議長潘公展はまた李聞暗殺は国家民族的損失であるとした。郭沫若は講演の中で“李、聞の死は、時代の悲劇誕生のしるしであり、彼らが死んでしまったとしても、彼らの生命は永遠に生き続けるであろう”と述べた。1913年から聞一多と清華学校の同じクラスで勉強をした民主同盟の中央常任委員羅隆基が、人々の心の中に共通してこだまする声を代弁した。“戦士の血は決して無駄には流れないのだ！一人が倒されても、千万人が起きあがるであろう！”[75)]

中国の自由主義者は国民党の独裁専制を早くから極端に嫌い、一連の束縛と虐げは彼らを統治の中心から次第に遠ざけただけであった。国民党は、その諸々の正義にもとる行いによって、多くの中間知識人に現実に直面しなくてはならないと激しく実感させたことに気づかなかった。聞一多暗殺はこうした進行過程を促進しただけであった。

歴史が示すように、聞一多と同じ思想的基盤を持つ知識人は、聞一多に哀悼をささげるうちに人道主義の境界線を越えてしまった。西南聯合大学化学学部長の黄子卿教授は聞一多の“学問道徳につとに感服する”とたたえると同時に、彼について“義に勇み、義を見てためらわない”、“主義のために犠牲となる”精神をいっそう高く評価し、聞一多を“黄河山岳のように生き、明神のように逝った”、その死は“泰山のように重い”とした[76)]。清華大学教務長呉澤霖は、目の前の社会には“暴政が横行”しており、“一多兄は民主のため、真理のため犠牲となった。その精神は永遠に生き続けるだろう”[77)]。清華大学の元老的存在である蕭公権に至っては「聞一多教授を哀悼する」という詩を書いて聞をたたえた“危言抗議震清流、狷極甘心与俗仇。豈冀憐才飛鶚表、不辞据乱学麟游。離騒別解尺驚人語、死水新篇骨憂。正気何妨偏処見、舎生成禍亦千秋”[78)]。一人の李という名の西南聯合大学物理学部の従軍学生が、聞一多の暗殺のニュースを聞き大声で泣いた。彼はすぐ青年軍を離れ、後には別の道を歩んだ[79)]。著名出版家の葉聖陶は、聞一多の死によってようやく国民党に徹底的に失望し、聞一多のような学者に対しての国民党の態度は許し難く、学術自由思想にはまだ前途があるのだろうかと考えた[80)]。

以上のことから、民主意識を備えた知識人について言えば、彼らは現実に対しては何とも手の打ちようがないのであるが、依然として国共間の見通しについて、甚だしきにいたっては国民党政権に対してまだ何かしらの幻想を抱いていた。聞一多の死は、彼らすべてに生々しい脅威と打撃を痛感させたのであった。1948年４月23日、北京大学、清華大学、燕京大学、師範学院の90名の教授は北平市党本部において、許徳珩、樊弘、袁翰青の三名の民主的教授に対する威嚇迫害に抗議する際、あわせて“我々はいっそう追求したい、第二の聞一多事件が謀られているのではないか？我々は当局に、聞一多教授の殺害は学者の現状に対する不満を排除し得ないばかりか、さらに彼らの警戒心と憤慨を深めてしまったと

忠告したい”[81]。

中国知識人のこのような変化は、遠心力を形成し国民党に十分重い代価を支払わせた。ずっと後に、ある台湾学者がこのことを思い返したとき、“国共両党の政治闘争史上、聞一多の死はその一里塚となった。聞一多のそれまでの経歴と彼の死が、国民党に不利な影響をもたらした。その重要さは金圓券（訳注：国民党が48年に発行した紙幣）の発行と失敗に劣らない”[82]。朱文が発表した出版物の主編は、当時西南聯合大学生であり、“巡りあった”人が編集の言葉で認めたように“聞一多の死、その影響は北京、天津などの重要な大都市だけでは決してなく”、“国内では、全国の知識人のいっそうの政府への非難や不満を引き起こし、国外では、米国のハーバード大学、コロンビア大学のような数多くの重要な学府と著名教授が連名で抗議し、中国へ内政干渉し、中国に対するいかなる援助をも断絶することを主張した。中国では国共紛糾を調整するマーシャル将軍はさらに蔣主席に厳重な抗議を提出した。”[83]

これからもわかるとおり、中間層を失った結果、国民党の統治基盤を弱体化させることになり、また国民党が大陸政権を失ったことの、まさかこのことが一つの重要な要素ではなかったなどとはいえるまい。

## 注

1）「中共代表団的抗議書」『新華日報』、1946年7月18日。
2）「周恩来将軍談昆明暗殺事件」『新華日報』、1946年7月26日。
3）「正告国民政府」、重慶、『民主報』1946年7月21日社説。中国民主同盟中央文史資料委員会編『中国民主同盟歴史文献（1941－1949)』、第204項、文史資料出版社、1983年4月出版からの再引用。
4）「民盟書面談話」、『新華日報』、1946年7月19日。
5）「李公樸案感語」天津『大公報』社説、1946年7月17日。
6）朱自清「中国学術界的大損失――悼聞一多先生」、『朱自清全集』第三巻、第122頁、江蘇教育出版社、1988年8月。
7）イスラエル・エプシュタイン『中国未完の革命』第383頁、新華出版社、1987年5月。
8）朱宝興「興奮自省拼命干」、重慶『大公報』、1944年9月29日。
9）「加速準備西南大戦」、昆明『正義報』「社説」、1944年11月24日参照。
10）「加強軍隊訓練、建立民衆武力、保衛地方協同作戦」、『新華日報』、1944年12月12日。
11）「蔣主席元旦昭示軍政、安危勝敗枢紐今年」、重慶『大公報』、1945年1月1日。
12）「聞一多被殺、平教育界甚為注意」、天津『大公報』、1946年7月18日。
13）「李聞被刺之巨波、中共向政府抗議」、天津『大公報』、1946年7月17日。
14）「朱自清到高孝貞信」、1946年7月17日、聞一多家に保存されているもの。
15）「李聞被刺之巨波、中共向政府抗議」、天津『大公報』、1946年7月17日。
16）「胡適薩本棟李済梁思成傳斯年到梅貽琦転高真唁」、1946年7月23日清華大学档案室保存。
17）沈従文「憶北平」、天津『大公報』“星期論文”、1946年8月11日。

18)「向社会及世界控訴、聞一多両子為父悼文、兪九家日報同天刊登」、天津『大公報』、1946年7月20日。
19)『梅貽琦日記選』、1945年12月14日、『近代史資料』総70号、中国社会科学出版社、1988年9月。
20)『梅貽琦日記選』、1946年2月17日。
21)『梅貽琦日記選』、1946年6月25日。
22)『梅貽琦日記選』、1946年7月15日。
23)「政治暗殺」、上海『大陸報』(英文) 社説、1946年7月19日。
24) 上海『チャイナウイークリーレビュー』社説、上海『文萃』第40期、1946年7月25日。
25)「昆明暗殺案、国際部注意了 (英泰晤士報発表評論)」、天津『大公報』、1946年7月21日。
26)「美加両国基督教徒対李聞案表痛恨」、香港『華商報』、1946年8月6日。
27)「紐育郵報提出警告」、上海『文萃』第40期、1946年7月25日。
28)「美国哈佛大学等五十三教授為李聞事件的抗議」、方仲伯編『李公樸紀念文集』、第69頁、雲南人民出版社1983年6月。
29)「美国哥倫比亜大学教授為李聞事件的抗議」、『李公樸紀念文集』、第67頁。
30) フィリップ・D・スプラウス「関於李公樸聞一多暗殺事件責任問題」、中共雲南師大党委党史資料征集組編『一二一運動史料匯編』第五輯、第101頁、1985年8月。
31) 1946年7月17日馬歇尓与周恩来会談紀要、郭曦暁訳。
32) 1946年7月17日馬歇尓与周恩来会談紀要、郭曦暁訳。
33) [米] フレイスト・C・バーク著、施旅訳『馬歇尓伝 (1945－1959)』、第130頁、世界知識出版社、1991年2月。
34) 1946年7月21日司徒雷登致貝尓納斯的報告 [美国 (＝米国、以下同様) 外交文書]。
35) 1946年7月21日司徒雷登致貝尓納斯的報告 (美国外交文書)。マーシャルの助手のピエールは『中国のマーシャル』という本の中でレイトンが廬山で蔣介石に向かって三項の要求を出したということを記しており、その中の第一項が“政府と昆明の暗殺事件の関連を否定し、これを世界に向かって徹底的に明らかにすること”とある。
36)『梅貽琦致教育部電文』、清華大学档案室保存。
37)「昆民盟十一人美領事館保護中」、天津『大公報』、1946年7月21日。
38) レイトンがバトワースに宛てた手紙の中で昆明領事館副領事の報告を引用したもの (美国外交文書)。
39)「政院通令各省市保護人民安全自由」、天津『大公報』、1946年7月18日。
40)「清華滞逾教授致教育部長朱家驊的信」、1946年7月17日、清華大学档案室保存。
41)『周炳琳致梅梅貽琦信』、1946年7月17日、清華大学档案室保存。
42)『胡適薩本棟李済梁思成傳斯年致梅貽琦転高真唁電』、1946年7月23日、清華大学档案室保存。
43)『王世傑日記』(手稿影印本)、1946年7月18日、台湾中央研究院近代史研究所1990年5月。
44)「参政会駐委会決議、請厳辦昆明暗殺凶手」、天津『大公報』、1946年7月20日。
45) 沈醉『軍統内幕』、第367頁、文史資料出版社、1985年2月。
46) 公安部档案館編注『在蔣介石身辺八年—侍従室高級幕僚唐縦日記』より1946年7月16日分、群衆出版社、1997年1月。
47)『在蔣介石身辺八年—侍従室高級幕僚唐縦日記』より1946年7月17日分。

48) 同前、1946年7月18日。
49) 同前、1946年7月19日。
50) 同前、1946年7月22日。
51) 同前、1946年7月23日。
52) 沈醉『軍統内幕』、369頁。
53)「蔣主席接見盧漢等」、天津『大公報』、1946年7月24日。
54)「李聞案即可大白、当局已獲重要線索」、天津『大公報』、1946年7月26日。
55)『在蔣介石身辺八年』、1946年7月27日。
56) 以上は『雲南公安報』による。喻芳が提供し王子明、単学修、崔宝山などの凶行犯を拘留する前に接した情報を総合して記者が作成した。原文は雲南省公安庁所蔵。
57) 沈醉『軍統内幕』、370頁。
58) 作者が潘大逵を訪問した記録から。1986年12月29日。
59) 高真「一多犠牲前後紀実」、『聞一多紀念文集』第381頁。聞一多夫人の元の名前は高孝貞で、後に高真と改名した。
60)『在蔣介石身辺八年』、1946年7月28日。
61)「張瀾在蓉受辱、参加李聞追悼会後、出場時被暴徒撃傷、鄧錫侯往慰問並厳令緝凶」、天津『大公報』、1946年8月20日。
62) この二名の特務の元の名前は湯世良、李明山。公開裁判前に改名した。
63)「中国民主同盟代表梁漱冥在瀘報報告李聞暗殺案調査経過」、中国文化書院学術委員会編『梁漱冥全集』第6巻、第638頁、山東人民出版社、1993年1月。
64)「中国民主同盟代表梁漱冥在瀘報報告李聞暗殺案調査経過」、中国文化書院学術委員会編『梁漱冥全集』第6巻、637頁。
65) 沈醉『軍統内幕』、371頁。
66)「李聞案民盟請移京公審」、天津『大公報』、1946年8月15日。
67)「顧祝同報告聞案審判結果」、天津『大公報』、1946年8月26日。
68)「中国民主同盟代表梁漱冥在瀘報告李聞暗殺案調査経過」、『梁漱冥全集』、第6巻、638頁。
69) 趙渢『如是我聞』、香港『華商報』、1946年8月17日。
70) 蔣介石のこのような手法は、蔣介石に非常に近い人物が日本の島根県立大学学長宇野重昭教授に語ったところである。2002年1月筆者がこの大学を訪問したとき、宇野先生が非常に慎重にこの点を指摘された。
71) 1946年8月10日トルーマン大統領が蔣介石に出した密信。朱匯森主編『中華民国史事紀要』、1946年7から12月分冊、356から357頁、台湾国史館、1990年5月。
72)「野火焼不尽、春風吹又生——請安眠吧聞一多先生」、上海『文匯報』、1946年7月28日。
73) 聞一多が狙撃されたとき、同時に長男の聞立鶴も攻撃され、足を断たれ、肺に数発銃を撃ち込まれた。聞一多夫人の高孝貞は心臓病が再発し、母子共々雲南大学医院で治療を受けていた。
74)「重慶六千余人挙行李聞追悼大会」、原文は『新華日報』、1946年7月29日、王康、王子光編『聞一多紀念文集』40頁、三聯書店1980年8月。
75)「瀘市各界五千余人挙行李聞追悼大会」、原文は『新華日報』、1946年10月6日、『聞一多紀念文集』50頁からの再引用。

76)『黄子卿夏静仁致高孝貞信』、1946年７月17日、聞一多家に保存。

77)『呉澤霖致高孝貞信』、1946年７月20日、聞一多家に保存。

78) 唐振常『漫記蕭公権』、北京『読書』1993年第２期、90頁からの再引用。

79) この西南聯合大学の学生は後に新疆大学物理学系の副主任となった。70年代に彼が筆者にこの経過を語ってくれた。

80)『葉聖陶伝稿』による。作者は商金林教授で、葉聖陶先生を訪問した時の記録である。

81)「北平四大学九十教授来函」、上海、『観察』第４巻第10期、1948年５月１日。

82) 朱文長「聞一多是如何成為“民主闘士”的」、台湾『伝記文学』第38巻第５期。

83) 編者「朱文教授『聞一多是如何成為“民主闘士”的』大文読後的幾句話」、台湾『伝記文学』、第38巻第５期。

(WEN Liming)